

室田村太郎之  
 三ノ木江、清土野島者南秀朝  
 平办洋巨印

右紙品白色、薄き竹紙ニ似タル紙也立軸五寸五分横軸  
 貳尺六寸五分也紙始々長五分六分七分トテ破綻ニ  
 明ク字ノ右ニ引紙赤（四分明ク又紙）上、処貳分ヨ  
 リ三四分トテ明ク下ナク。トイ及壹貳分ト明ク又紙目壹  
 寸所書簡袋様ノ青色ノ景紙ヲ手細工立軸五寸七分横軸  
 貳寸壹分也



富樫庶流坪内家一統系図並由緒



一 明治廿七年新八月十九日 支那朝日新聞 電報  
 ●平壤の激戦 支那軍釜山特派天野敬致至急電  
 今日平壤に激戦あり我軍大勝利との報を得たり  
 ●大勝利 支那軍釜山特派天野敬致至急電  
 前報は確實なり  
 ●我軍平壤を抜く 支那軍釜山特派片山樗三次發至急電  
 今左の三電を得たり  
 第二報 七時四十分八時中和發  
 昨日來師團は平壤を圍ふ激戦の後大勝利、今朝未明全  
 く平壤を略取す敵の死傷極めて多し我軍將校以下死傷



●軍は明日牛莊の敵を攻撃するの目的を以て行進す  
 ●第五師團は牛莊城東北面に向いて攻撃する者なり  
 二師團は明日牛莊街道の北方に在る道路を取り牛  
 莊城の西北面に向いて前進せんぞす  
 三獨立騎兵隊は午前五時古城子を出發し牛莊北方刑家  
 窩房方向に前進し敵情を偵察すべし  
 四前衛は午前六時古城の西端を出發し古樹子、張成灣  
 孫家旺臺、刑家窩房を経て牛莊城の北面に向ひ  
 て前進すべし但し牛莊街道に一部隊を出し第五師團  
 と聯絡すべし  
 五本隊は明日午前五時耿莊子北端に先頭を置き行軍序  
 列に従ひ益上級隊に參合すべし  
 六本隊の中隊備砲隊は古城子以西は前衛の經過路を行  
 進し刑家窩房に至るべし但し護衛として歩兵第十九  
 聯隊の一小隊を付す  
 七大行軍は午前七時糧秣の分配を受けたる後古城子に  
 向ひて行進すべし  
 八砲重第一擧隊は明日午前八時三十分宿營地を出發し  
 大行軍に續行すべし但し第一擧隊砲隊歩兵糧秣全體  
 列野砲及山砲各半縱列は午前六時宿營地を出發し本  
 隊の後尾に續行すべし  
 九擧重第二擧隊は同日九時三十分出發第一擧隊に續行す  
 べし  
 九予は午前五時耿莊子の西端に在り行進中は本隊の先  
 頭になりて行進す  
 當日の軍隊區分は左の如し  
 軍隊區分



一 獨立騎兵隊  
 騎兵第〇〇隊  
 一 前衛 司令官大島少將  
 歩兵第〇〇〇隊 騎兵〇〇隊 野戰砲兵  
 第〇〇隊 工兵第〇〇隊 衛生隊  
 一本隊  
 師團司令部 騎兵〇〇隊 歩兵第〇〇〇  
 司令部 歩兵〇〇隊 工兵第〇〇隊  
 野戰砲兵第〇〇隊 歩兵第〇〇隊 衛  
 生隊 東者輸送部 豫備砲隊  
 前衛は午前十時過、本隊は十一時頃何れも牛莊城西  
 面附近に到着せり、**桂中將**は刑家窩の南端にあり、此時  
 牛莊城中を望見するに、數流の旗幟を懸へし城中何ぞ  
 なく騷擾の形勢あり、獨立騎兵隊は刑家窩の高地に登  
 りて城中を偵察せしに、城の東南方より敵の縱隊横行す  
 る者あり、是れ或は城外に在りし敵兵が歸城せし者な  
 らんか、十一時十分に至りて、前衛の砲兵隊は刑家窩  
 の南端田園に野砲の陣地を設け發砲を開始せり、然れど  
 敵由更に之に應砲せず、我山砲隊は城の北方一千歩突  
 込に進みて放列を設け同じく發砲し、歩兵を展開し  
 て城邊に接近せし、歩兵の進攻に際して敵兵は遂に發  
 火を始め激しく射撃するに至れり、此時敵は我軍隊に向  
 て**火箭**を發せり、交戦中の一奇觀なり、此方面の射撃正に  
 敵の**砲隊**右側に展開し其隊伍は急集し敵隊  
 而震入如きも更らに顧看するなく、**機隊**を以て城を目標  
 して運行し敵の射撃益々烈なるに當りては、**一隊一齊**に  
 軍歌を奏し其聲頗々威風四座を擗りて猛進せり、時に刑

家窩の南端にありし野砲は其位置を警隊の後方に對  
 し其進行と共に烈しく砲撃せしに、敵は第十八聯隊の猛  
 進を野砲の砲撃に嚇しけり、人其射撃稍々減少するに至  
 れり  
 本隊の**第十七第九兩聯隊**は城の西方に其の特に**第七聯**  
 隊は西南方田莊臺に通ずる街道口に至り牛莊城市街  
 通ずる河流の堤上より**先頭第一**に**城中**に進入せり、**第五**  
 師團は第三師團より稍々遅れて城の東方に迫り、是亦砲  
 撃射撃と猛烈に開始せり、然れば牛莊城の四面は我兵  
 を以て之を包圍し、敵は此優勢に鑿せられ城を奪て、逃  
 走せん、こし田莊臺街道に出づれば既に我第七聯隊の城  
 中に進入しつゝ、あるあり爲に退路を断たれ、**東北**に皆  
 我兵ならざるは、なく只漸く南方營口街道の一角を切開  
 きて血路を求め遁走するを得たり、然れども敵の多くは  
 遂に退路を失し市街に彷徨し、總には**我兵の未だ曾遭**  
 敵兵は遂に民家或は倉庫に潜伏せし者多く午後一時頃  
 は牛莊城全く陥落せし、敵兵の民家兵舎に潜伏せし者  
 は我兵を見れば壁孔或は塹壕より狙撃して頗る危険な  
 れば各隊より二三中隊を出して**城中搜索隊**となし、家々  
 悉く搜索せしめしに、敵兵意外に多く、或は二百或は三百  
 或は數十團となりて兵舎等に立籠り、又家々に一人二人  
 の蓋をもあり、而かも敵等は死を法しかの積り人限り、妨  
 害に身を盡したれば、空馬に城中と一掃するを得ず、初め  
 城中の殘兵を剿滅するには何の苦もなかるべしと思ひ  
 しに、所獲殘屍を嗜むの言談に漏れず、頑固に抵抗せし  
 より止むなく、彼等の開籠れる家屋に砲丸を打込み、或は



綿衣を以て破壊し入口を開きて我兵突貫以て敵兵を撃つる者もあり夜に入りて二百名許りの一團と三百名許りの一團は遂に銃を射て剣を振り降せし五曲師團の挿入されし斯く城中搜索混雜の爲各隊何れも城中に入るを得ず第三師團司令部は午後七時頃漸く城の北端に入り合登し各隊は多く城邊に設置せり翌朝市街に出づれば人家に途上に人馬の喧聲狼藉其發賣に討るべからず時至り七聯隊が進入せし河流の中は結氷積雪の上には横はれるもの點々算を敵し人をして慄然たらしめたり平塚の彼城外に多數の敵兵を斃せしむ此後にはすべくもあらざりといふ小死敵の數を開くと二千二百幾箇の影しきに及ぶたりとぞ以て市街戰の激烈なりしを推測するに足るべし

**牛莊城の敵兵**

牛莊城には敵兵數萬あり其將に知名の者多し之聞きしに攻撃の當日は敵將李光の部下五十餘輩李善の部下三十餘輩の部下三十餘總て一萬内外なりしと徐邦道は數日前は在城せしと攻撃面三月前遼城を攻撃すに極し東方に向て出發し留守の當日は營口附近にありしなりんといふ

**桂宇將相撃せらる**

桂宇將は牛莊城攻撃の初に當りて刑家窩房にあり後轉じて第十一聯隊攻撃方面の後方に移り又轉じて牛莊西北方の城端に至り一民衆の傍に於て諸般の指揮命令を爲し近傍には閑地營殿下其他參謀將校等數十名集合ありしが敵の兵何れより進出でけん二百米突撃前方の壁後より此舊圍を掛けて相撃せり一度ならず二度

の銃丸飛入りしにせ一同門内に馳せ入りたり恰かも好し當時殘兵のありし傍の峯屋に第十九聯隊の松本副官徳直搜索の爲め兵士と共に在り銃聲を聞きて顔みれば殘兵將に第三段を裝せんとするの時なりければ眞に之を撃殺せし者なりん幸にして一人の微傷だもかりしは我師團の爲誠に慶賀すべき事共なり

**佐藤大佐の負傷**

第十聯隊が夫の軍報を奏し當軍機隊を以て猛烈に進撃するや聯隊長佐藤大佐は敵丸の爲め左足の關節を打穿すがれ騎馬も亦頭蓋を撃たれて死せり大佐の勇戦なる平塚後以來命令天下に布く今日此不幸に逢ふ國より其平素の覺悟なるべけれど今や軍事多端の時機に當りて此事ある誠に國家の爲め我師團の爲深く痛惜に堪へざる所なり負傷は輕微と言ふにあらざるも幸にして生命に關する程にはありず或は左足は切斷するの止むを得ざるに至るべしと云へり大佐負傷の報桂中將の許に達するや中將は驚然として慈容を現し直に宇治田副官を馳せて其の容体を見舞はしめたり時猶交戦中なれば副官は驕馬に策す敵陣を潛り其所に至れば既に擡れを以て鎗聲所に送還せし後なれば即ち轉じて鋭しく負傷を見舞ひ委曲を中將に報告せり副官の至りし時は大佐も多少苦痛を感じざるがれありしが氣色昂然談話平生と異なるなかりしとぞ

**我死傷**

第三師團のみにて傷者百七十名、即ち四十名にして其



内將校の死傷姓名左の如し

即死	步兵大尉	新保
同	豫備士官	篠谷
同	步兵大佐	佐藤
同	步兵中尉	岩本
同	川口	金之助
同	兒玉	龜一郎

捕虜及戦利品

今回の捕虜は意外に多く全数は六七百餘に及び第  
三師團のみにて四百餘名あり捕虜中敵將李光九ありと  
云ひ或は他の將校もありと言へども未だ取調に至らず  
戦利品の如き兵器糧食等甚だ多数なるも留落の翌日は  
既に進行せし爲め詳細の調査なし軍司令部副官大島少  
佐は調査の爲め残留する事となりたり尙後報すべし

戦術雑談

將校の危険 牛莊陥落後午後三時頃より兵頭砲兵少  
佐雅憲師團參謀官兒島歩兵大尉八二郎(西丸)兵頭砲兵少  
官三騎兵一中隊を従へて牛莊より南方六里程餘なる  
下口子附近遼河結氷の厚薄探見の任務を帯びて出張せ  
り一行は大馬身を遺りて下口子の對岸に至り其任務を  
遂げ更に大馬身を出でて歸途に試みに大馬身附近の  
各村落には多数の敵兵正に舍營を求めつゝあり一行の  
通過を見るや日兵來れり大呼し聲に應じて現はれ出  
でたる者甚だ少くとも七八百許り一行の少数にては逆  
も敵對し難し之雖も既に敵兵の眼前に現はれ出でた  
るに際して後方に退却する事も成り難く一行死を法し  
て群衆の中央を突貫せんご一決し騎兵數騎を先頭に立

て一回哨馬に一報して突進し群がり来る清兵を右に  
左に擁立て碎り去り遂に一條の血路を開き兵頭少佐  
兒島大尉等は漸く翌朝九時頃牛莊の舍營に歸るを得た  
ると一行中の騎兵數名は敵中に巻き込まれて其所を  
失し武藝通譯官は騎馬を銃撃せられて馬と共に倒れ大  
其生死を詳にする能はざりき翌日に至り離散せし騎兵  
等建々歸り來りたるも獨り武藝通譯官之騎兵一名は遂  
に歸らず尙は最早生存せざるべしとの噂なりしに一日  
を隔て、六日の夜中突然武藝通譯官は歸り來れり帽もなく  
靴もなく鎧をも脱したる日本刀を提げ居り其狀如何に  
も苦戦奮闘せしが如し一同は意外の聲きに巻細の狀况  
を聞けば爰に馬上敵を斬り離けつゝ兒島大尉の後を追  
うて馳せ行く折柄騎馬の射られて倒るゝと共に墜落し  
止むを得ず傍らの溝に滑みしかば夜中の事さて敵營等  
も之を氣合がざりしも據此處にては不安心なればとて  
高麗裡の所に潜り込み爰に一夜を明しぬ翌朝敵兵等は  
皆前方に出發せしし或は残兵なきを保し難ければ終日  
高麗中に在り夜に入りて漸く出て牛莊に向て馳せ我哨  
兵線内に達するを得たりとぞ萬死の中に一生を得たる  
ものご云ふべし此敵兵等は皆牛莊の敗兵にして三三五伍  
が遺走せし者の大馬身数倍に集合し回柱臺に走りんとす  
する者有らんといふ

衛生隊の動作 此日先づ其大部を以て刑家富房に編  
成所を設け野團の團なるに及びて進んで他の全部を以  
て牛莊西門外に繃帶所を設置し交戦短かかりし爲傷者  
の收容を速かに終了し且野戰病院を刑家富房に開きた  
るに因り傷者の治療も速かに着手するを得て好果を見



たり

營口進行 (三月五日)

牛莊城の敵を撃破してより敵は幾んど潰れしもの如し之雖も他の敵隊は營口方向に破せる状態なるを以て之を撃破せんが爲め軍口營口方向に進行の命を發し第三師團は本日正午を以て營口に向つて牛莊城を出發せり而して當日は行程三里内外に止まり前衛は藍旗溝、本隊は曾家屯附近に設營せり

我軍方向再轉す (三月六日)

前日の敵情偵察に據れば高刊に敵兵屯在せり之を以て本師團は先づ之を攻撃するの命令を發し前衛本隊共に午前七時其全營地を出發し前衛に前進し漸やく近づき至り前衛の偵察は高刊に敵なし報告し正午頃は前衛本隊共に高刊に集合せり土人の言に據れば此地前に敵兵の集屯を見し牛莊城陷落の翌朝即ち昨五日早天を以て皆回莊臺方向に退却せり之を我軍の牛莊城を出發したる時は營口に進行すべき豫定なりしが敵の主力は田莊臺に在りこの偵察を得且第二軍の第一師團は毎朝日其主力を以て大石橋附近より老翁谷向に前進すべき筈なれば若し營口に敵兵の殘留するあらば無論第一師團の撃破する所となるに至らん爰に於て我軍の方向は轉じて田莊臺に向て進行する事となれり午後一時過前衛本隊も田莊臺街道に浴して高刊を發し行程三里内外にして前衛は白草回附近本隊は給南序に設營せり

高刊を發して進行中營口方向に當りて砲撃事種々甚だ激烈なるを解く、翌日第一師團の報告に據れば營口に三

千の敵ありて格抗せしより即ち師團は之を攻撃せしに敵は海岸砲を以て砲撃を試みしも遂に攻撃する能はず田莊臺に退却し營口は師團の占領する所となりたり即ち知る昨日の砲撃は敵の海岸砲を發砲せしなりしを午前五時前衛は柵欄に、七時本隊は牛園子に向て各其營地を出發せり此日朝来陰雲濃なりしが午前十時頃に至りて激しき風雪となり咫尺辨ずべからず無敵又一營を加へ次第く之各隊は漸く其目的地に到着するを得たり前衛は楡前寺田莊臺の敵情を偵察すべき任務を保ちし風雪の爲止なく何れも早急な營地を設けて休

牛園子に向ふ (三月七日)

加しを月廿八日以來我軍破行の勢を以て且戰以且進み積雪泥濘の中運歩累も不便にして軍士の疲勞思遣らるゝ計りなり余等の如きと通信を認むるの閑々一無き程にて大に疲勞を感せしが今日に至り漸く此戰報を認むるを得たり

從征録 (三十八)

三月十二日於田莊臺街道上高刊營地

特派員 樺澤十次郎

攻撃偵察 (三月八日)

本日は朝来天氣晴片雲と見ず前衛第一旅團は田莊臺の敵隊を偵察する事となれり偵察の方略は攻撃の形勢を示し以て敵勢の程度を觀察せんとするに在り午前七時頃前衛第一旅團は田莊臺附近に設營せり

野砲十二門の放列を敷設し歩兵展開の形を爲せしに敵兵は遼河右岸に放列を敷き歩兵をして遼河を渉り左岸



の村落に進まし其砲撃は甚だ激烈にして尋常の砲に  
 おり亦その推測を生じ且彈丸の命中せる處亦從來の  
 手際に非らず遂に右岸を望見すれば砲数は少くも三十  
 門以上に及びべし又我亦兵の將に皆進せんとするに當  
 りて敵の歩兵より射撃すること甚だ激烈にして是亦出  
 色の勢あり尤に角田莊臺は敵の根據地にして其兵も櫛  
 やも敷、軍器も櫛なかり事至事實に偵察し前衛は其任  
 務を終り倉庫地に皆進せり

此行の攻撃偵察なくし事は前衛の兵士は勿論下士階級  
 も多くは之を知らず既に攻撃の形を爲しながら敢て進  
 撃の命もなく敵の頻りに發砲するに任せ皆進の命とす  
 せしかば兵士は益疑惑を生じ未だ進撃せざるに早く持  
 進の命あるは不思議千萬なり吾々は是甚數度の戦場だ  
 出でしもまた敵に背旗を見せたる事なく生命を賭して  
 勝敗を決すべしと戦ひて皆進するは残念至極なり  
 と嘆く者すらありければ士氣の興廢に關する者あれば  
 こそ大島少將突直は三好大佐成行として各隊に其攻撃  
 偵察なる所以を説明せしめ衆始めて之を會得せり

巴莊臺殲滅(三月九日)  
 本日は敵軍の根據地たる巴莊臺殲滅せられたり昨  
 日桂中將は部下各隊に左の命令を下せり

一軍は明日第一師團を協力して巴莊臺の敵を攻撃せん  
 ます

第五師團は師團の右側に在りて巴莊臺に向て前進す  
 二師團は明日本道より巴莊臺に向て前進せんとす  
 三橋立騎兵隊は明日午前五時宿營地を出發し師團の右  
 側に在りて第五師團と連絡を取り巴莊臺を搜索すべ

四前衛は南部郡拉棟東南方に集合し巴莊臺の敵情を搜索  
 すべし

五本隊の諸隊は午前四時三十分本團子畑地に集合すべ  
 し

六野戰砲兵第三聯隊三大隊本部及第六中隊は明日午前  
 二時半並に黒雲濱西端に至り西少將の命令に入るべ  
 し但臼砲の門は午前五時三十分逆朝部拉棟迄に至る  
 七大行李は本隊の諸隊出發後半園子東方畑地に集合す  
 べし

八騎臺第一梯隊は明日午前七時出立の用意を爲しあ  
 べし但第一野戰病院患者醫送部歩兵彈藥全縱列野砲  
 彈藥縱列山砲彈藥縱列は午前五時三十分出發南方拉  
 棟に向ひ前進すべし

輪重第二梯隊は明日午前七時出發の準備を爲しあ  
 べし

九予は明日午前四時三十分本隊の集合地に在り  
 當日の軍隊區分は左の如し

軍隊區分

獨立騎兵隊  
 騎兵第〇〇隊

前衛 司令官 大島少將  
 歩兵第〇〇〇隊 騎兵第〇〇〇隊 野戰砲兵  
 第〇〇〇隊 工兵第〇〇〇隊 衛生隊

本隊  
 歩兵第〇〇〇隊 騎兵第〇〇〇隊 野戰砲兵第  
 〇〇隊本部 第〇〇隊本部 第〇〇隊本部 砲  
 兵第〇〇隊 衛生隊



前日の第六旅團の攻撃復讐に由りて田莊臺の敵勢を  
 撃つし第三師團はたれが攻撃主力となり第一師團は左  
 側第五師團は敵勢を撃つて三箇師團の協力を以て三箇  
 師團は田莊臺を襲撃せんとす第三師團副團長は午前五  
 時頃既に目標に至りて澁河左岸の近傍に接近し本隊亦  
 牛園子に集合し續て目標に向て前進し第一師團各隊も  
 左方遙かに縦隊連絡して進行せり此三箇師團の野砲  
 は合して二隊となり之に加ふるに準備砲廠の臼砲射撃  
 其總數九十二門の多きに及び黒田砲兵監(全砲目から之  
 を指揮總監し知前八時頃には澁河の左岸に我砲兵陣地  
 を連設せり此時敵の砲臺よりは既に砲火を開始し我軍  
 即ち應砲を放ち九十二門の砲門漸次に發火し其響みに  
 百響の一時に轟くが如く硝烟は濛々として天に漲り田  
 莊臺の天地は我砲聲の氣響に包まれ其光景の凄まじや  
 言はん様なし  
 斯くて砲戰終りし頃我前衛第三旅團の歩兵に敵兵  
 第六旅團の歩兵は進んで澁河左岸の小堤に據り暫く敵と  
 對戦せしが此時敵の射撃は非常に猛烈を極め我兵又激  
 しく發火し我砲の銃聲砲撃天地を極かせり對戦少時に  
 して第七聯隊の鈴木少佐率ての一隊は第九聯隊藤本  
 必佐(少佐)の二隊と先きを導いて叫喊し岸の堤塘を越  
 て澁河に飛び入り氷上を馳せて田莊臺を薄せり敵は  
 此處に據りしげん忽ち狼狽散亂を始め田莊臺の市街に  
 侵入す我兵勢に乗じて襲撃して敵の多數を撃殺せり  
 我右翼たりし第五師團は前夜澁河の上流を定進し今朝  
 俾曉より進行せしが田莊臺の東北方にありて蔡家屯に敵

大約三百人委細路より  
 十六日午前八時 野津師團長  
 第二報 發六時廿八分 發八時十分 發十時十分 發十一時十分 發十二時十分  
 即團は糧食の大困難に拘りて谷道より平塚に向て前進  
 し昨日を以て齊しく城の四面を圍ふ激烈な戦闘とな  
 し大勝利を得今朝未明を以て全く之略取し敵の大將左  
 實貴以下死傷生擒 兵器、茶穀の我手に落ちしもの極  
 めて多數敵の兵力は二萬を極せしが昨日來一二群を在  
 して我哨兵線を逃れ去りしのみにして他は約死傷捕  
 虜之打れり我軍死傷將校以下三百人、大勝利敵の大將  
 左實貴は奉天府及び牛莊附近に在りてし側軍の統領  
 なり云々  
 第三報 十六日廿九時 發九時十分 發十時十分 發十一時十分 發十二時十分  
 昨日平塚攻撃の際我軍の死傷者將校十一人下士以下  
 二百六十八人即死未詳入院後死亡二人  
 澁河洞中和の北二里に於て 柴田第一野戰醫院長  
 在農馬 石黒野戰衛生長官  
 以上取あへず昨朝號外として報道せし所なり未だ  
 及びさる方もありん  
 ●平塚戰報 昨午九時 益山特派 天野旅団長 益山  
 昨日平塚の戦は我軍四方より取圍ふ敵兵死傷頗る多し  
 ●又 王皇前 同日  
 討取りたる敵兵二萬との説あり  
 ●又 王皇前 同日  
 激戦ありしは十五日にて十六日朝平塚を占めたる捷報  
 に接し居留人喜びて家に國旗を掲げ道に狂舞す  
 ●捷報公示 益山特派 天野旅団長



又令我領事より平壤の大勝利を公示したり

●勅語

（宣慰）慶島特派片山猪三次發

今日大本營に於て御前會議を開かせられし時左の勅語

奉賜へり

朕本營を進むるの初に當り我軍大に平壤捷つ

の報に接し深く將校下士卒の勤勞を察し速に特異の功績

を奏せしを嘉す

是に於て有樞川參謀總長の官は直ちに電信を以て之を

在韓第一軍司令官聯合艦隊司令長官及第五師團長に傳

宣せられたり

●令旨

又今日有樞川參謀總長の官は在韓第一軍司令官及び第

五師團長へ左の電報を發せられたり

平壤の大勝利を直ちに皇后陛下へ言上せし處贈し御

滿杯將校の忠勇なるを深く御感賞の旨御沙汰あらせ

たられたり此旨傳達す

●敵兵來襲

（宣慰）平壤 東京發

我方へ左の來電ありたり

元山より進みたる我軍は一時根據地を成川に定め豫定

の日燃川を發し江東に進むや去十三日般川より來りし

清兵千五百許成川に留められ我一中隊許の兵に向ひて

戰を挑み我兵苦戰遂に之を撃退けたり

●平壤攻撃の事

（宣慰）平壤 釜山特派天野敏彦

平壤攻撃の主は斯少將の朝鮮隊にあり如く昨十五

日平壤總進撃をなすべき日取なりき

我軍の糧道は〇〇〇〇を取れば少しも差支なし

●釜山の光景

（宣慰）釜山特派天野敏彦

今日は雨天なるも居留邦人前線の如く皆狂奔して相慶

し港内碇泊の諸船總て滿艦飾して祝意を表すゆへ正月

の如し

●清軍盛狀

（宣慰）釜山特派天野敏彦

仁川十一日發青山好惠の報左の如し

大同江は我兵扼守し〇〇〇之を掩護し平壤清軍の糧

道を絶つたれば平壤の清軍は震中の鼠の如し

清軍の掠奪甚だしく爲に平壤附近路を住民なし

●從征録

（宣慰）三月八日 歐朝日新聞

三月七日於田莊裏街道上牛園子會

●耿莊子に向ふ

（三月三日）

牛莊に達する途上耿莊子に向て前進す午前十時頃書類

等を總覽し行程四里餘午後二時ごろ耿莊子に達す訖

總進んで會營し本隊其他各隊は耿莊子に設營し命ぜり

たり此日師團司令部の普預屯計なる金軍臺を行進中

參謀總方砲兵大尉は騎馬の水上に滑倒すると共に轉落

し右足の筋骨を挫きたり治癒は少くとも數週間を要す

る醫師の見込にて到底師團と共に行進するを得ざれば

止むべく構架を以て海城に送還せられたり前に我師團

の海城攻撃行進中二道河子に於て夫の參謀の負傷せる

あり疑方參謀今又此奇禍に逢ふ參謀の心事察すべきな

り

耿莊子は依將軍の是逆會營せし處にて其家屋の近傍に



高き十丈餘の物見臺あり、依は急に登りて遠く海城方面  
なる我軍の運動を觀察せしなりと云ふ

### 依將軍の逆情

耿莊子土人の言を聞くに、依は清曆十二月十八日、我一月  
十三日此地に來り、其兵は一萬餘を擁するも、實際戰力  
を有する者は百人に付、七十二人の割合なり。日本軍の久  
しく海城に籠居せるは、其兵力の少なきを爲なれば、是非さ  
も海城を回復せんとは、其難き所にして、切りに牛莊  
城、田莊臺等に在る同僚に謀議する所あり。臺灣城を攻  
撃せし次第なり。然るに、毎戰、臺を制する能はず、而かも十  
人餘の死傷者を生じ、且糧食檢與の乏より、兵士等は近  
傍を拮据し、或は逃ぐる者あり。軍隊の混亂最も甚し  
きより、大に苦むせる折、日本軍進撃し來り、之歸來せ  
し敗兵の報告ありし、かば、痕根、牙所を知らず、其夜十二  
時、颯々遼瀋に向つて引返せり。其旗下の將にして、海城數  
度の敗戦に李、長及び一營に長たる者、數人死傷せり。且  
廿八日の夜には、死傷者逃亡者等の爲、十餘の兵を減じ、其  
引返せし時には、軍勢甚だ微弱なり。其日出發後、翌日午後  
牛莊城の清將より、使者馳せ來りて、書面を携へ、居りしか  
に、出發後の事として、空しく還り去れり。書面の要旨は、依將軍  
にして、檢取閣の意を、尔るや、吾を問合せ來りし者なりし

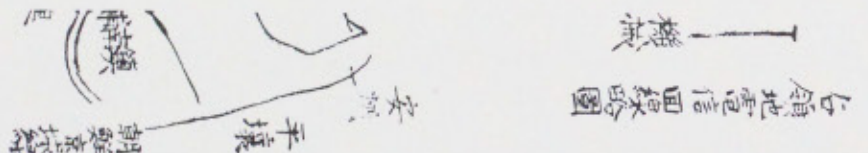
### 牛莊城大激戰 (三月四日)

昨(四)日は本日(五)を以て牛莊城攻撃の事を豫定し、桂中將は  
三日午後八時を以て、左の命令を各隊に下せり  
一、號は牛莊城及二臺子、三臺子附近に在り

兵數千屯集し之を防禦せんとす。第五師團(即ち之を攻  
撃し)交戦の後、敵は田莊臺に退かん、とせしが、恰此時を同  
じうして、我本隊の第十八聯隊の田莊臺北方に、進軍す  
るに當り、敵は攻撃せらる、甚となり、其痕根一方なり、殆  
んど退路を失せんとせしが、漸くにして、西方を據して、逃  
去せり。此敵兵、防戦の急、第五師團は他の二箇師團が田莊  
臺攻撃の時期に稍遅れたるや、の感なきにあらざり。聊  
くて午前十一時に至り、田莊臺全陥没し、我兵漸を以て  
進入し、萬歳の歡聲、許々に響き、桂中將が西方より、進んで  
市街に入りし時は、先入の我兵中將を、迎へ、異口同音、歡  
を唱へ、歡天喜地の状、見ても勇ましかり。と

此日、桂中將は砲戦の旺んなりし、頃南方、拉標にありしが、  
後本隊と共に、田莊臺の西北方を指して、進み、第七、十九  
兩聯隊の喊進入せしを見て、聞もたなく、馬上、遼河の水、上  
を渡り、田莊臺、西方より、進入して、市街を巡視せり  
此交戦に於ける我勢、かは前述べの如く、實に三箇師團の協  
力を成り、我陸軍開創以來、未曾有の優戦と云、遼東大軍  
原の開闢地に在りたり。大り、砲台の勢力如何、何ばかり、大なり  
とするも、安んぶ、此精緻なる大軍に、抗敵すけんや、其根據  
地として、奇備を、築にし、精兵銳器を以て、宋慶、義符、北處  
を最、後之力を極めて、防禦せし、も一撃の不慮と、敢て、撃  
破せらば、其軍隊を、破滅せらる、に至りしもの、豈、偶然、な  
らんや

一、明治二十八年四月十三日、濃飛日報









平康の攻撃に於て死者士官八名下士卒百五十四名婦者將  
 校二十六名下士卒百七十七名雜卒三名生死未詳の下士四  
 十名敵の死者約二千餘名<sup>諸君ハ別然シ難分難</sup>も死者倍ハ<sup>ハ</sup>多し捕虜及  
 耶人五百十三名

一前驥ニ記テ勝軍利  
 ノ因ニ表ニ記テ也

明治廿九の中年

新十一月五朔日夜

新六時過坪内定

年俸定國同件只

今置テ候由ニテ定年

菓子箱持恭風意體ニテ菓子月異候<sup>箱薄クハ實細ニ得テ</sup>

菓子箱六十程勝軍利ノ圖右ノ如シ味ニ甘美ニシテ無比

類珍<sup>類珍</sup>菓子箱<sup>菓子箱</sup>菓子箱<sup>菓子箱</sup>菓子箱<sup>菓子箱</sup>

匣上製菓子菓子箱<sup>菓子箱</sup>菓子箱<sup>菓子箱</sup>菓子箱<sup>菓子箱</sup>

匣上製菓子菓子箱<sup>菓子箱</sup>菓子箱<sup>菓子箱</sup>菓子箱<sup>菓子箱</sup>

匣上製菓子菓子箱<sup>菓子箱</sup>菓子箱<sup>菓子箱</sup>菓子箱<sup>菓子箱</sup>

匣上製菓子菓子箱<sup>菓子箱</sup>菓子箱<sup>菓子箱</sup>菓子箱<sup>菓子箱</sup>

匣上製菓子菓子箱<sup>菓子箱</sup>菓子箱<sup>菓子箱</sup>菓子箱<sup>菓子箱</sup>

匣上製菓子菓子箱<sup>菓子箱</sup>菓子箱<sup>菓子箱</sup>菓子箱<sup>菓子箱</sup>

匣上製菓子菓子箱<sup>菓子箱</sup>菓子箱<sup>菓子箱</sup>菓子箱<sup>菓子箱</sup>

匣上製菓子菓子箱<sup>菓子箱</sup>菓子箱<sup>菓子箱</sup>菓子箱<sup>菓子箱</sup>

匣上製菓子菓子箱<sup>菓子箱</sup>菓子箱<sup>菓子箱</sup>菓子箱<sup>菓子箱</sup>

匣上製菓子菓子箱<sup>菓子箱</sup>菓子箱<sup>菓子箱</sup>菓子箱<sup>菓子箱</sup>

匣上製菓子菓子箱<sup>菓子箱</sup>菓子箱<sup>菓子箱</sup>菓子箱<sup>菓子箱</sup>

匣上製菓子菓子箱<sup>菓子箱</sup>菓子箱<sup>菓子箱</sup>菓子箱<sup>菓子箱</sup>

匣上製菓子菓子箱<sup>菓子箱</sup>菓子箱<sup>菓子箱</sup>菓子箱<sup>菓子箱</sup>

匣上製菓子菓子箱<sup>菓子箱</sup>菓子箱<sup>菓子箱</sup>菓子箱<sup>菓子箱</sup>

匣上製菓子菓子箱<sup>菓子箱</sup>菓子箱<sup>菓子箱</sup>菓子箱<sup>菓子箱</sup>

匣上製菓子菓子箱<sup>菓子箱</sup>菓子箱<sup>菓子箱</sup>菓子箱<sup>菓子箱</sup>

匣上製菓子菓子箱<sup>菓子箱</sup>菓子箱<sup>菓子箱</sup>菓子箱<sup>菓子箱</sup>

匣上製菓子菓子箱<sup>菓子箱</sup>菓子箱<sup>菓子箱</sup>菓子箱<sup>菓子箱</sup>

匣上製菓子菓子箱<sup>菓子箱</sup>菓子箱<sup>菓子箱</sup>菓子箱<sup>菓子箱</sup>

匣上製菓子菓子箱<sup>菓子箱</sup>菓子箱<sup>菓子箱</sup>菓子箱<sup>菓子箱</sup>

匣上製菓子菓子箱<sup>菓子箱</sup>菓子箱<sup>菓子箱</sup>菓子箱<sup>菓子箱</sup>

匣上製菓子菓子箱<sup>菓子箱</sup>菓子箱<sup>菓子箱</sup>菓子箱<sup>菓子箱</sup>

匣上製菓子菓子箱<sup>菓子箱</sup>菓子箱<sup>菓子箱</sup>菓子箱<sup>菓子箱</sup>

匣上製菓子菓子箱<sup>菓子箱</sup>菓子箱<sup>菓子箱</sup>菓子箱<sup>菓子箱</sup>

匣上製菓子菓子箱<sup>菓子箱</sup>菓子箱<sup>菓子箱</sup>菓子箱<sup>菓子箱</sup>

匣上製菓子菓子箱<sup>菓子箱</sup>菓子箱<sup>菓子箱</sup>菓子箱<sup>菓子箱</sup>

栗絵  
栗色



### 近世の歴史

一明治廿九年申年三月廿七日三列漢美路豊橋町衝突江出狀  
 封書ニテ  
 電報線三回、小隊  
 陸軍歩兵第十八聯隊  
 第十一中隊  
 杉野曹長  
 保岡海之助殿  
 小隊  
 九百八番十一  
 保岡海之助殿  
 小隊  
 九百八番十一

一明治廿九年申年三月廿七日三列漢美路豊橋町衝突江出狀  
 封書ニテ  
 電報線三回、小隊  
 陸軍歩兵第十八聯隊  
 第十一中隊  
 杉野曹長  
 保岡海之助殿  
 小隊  
 九百八番十一  
 保岡海之助殿  
 小隊  
 九百八番十一







# 岐阜新聞 岐阜市、林町 新聞 高岡

本報は、岐阜市、林町に於て、  
 明治二十九年五月一日に創刊され、  
 毎朝発行せらる。其の紙幅は、  
 横八寸六分、縦一尺一分、  
 紙質は、上等の和紙を用ひ、  
 印刷は、最新式のもので、  
 文字は、極めて明瞭である。  
 本報の内容は、岐阜市の政治、  
 経済、教育、文化、スポーツ、  
 社会問題等、幅広く取り扱ひ、  
 読者の利益を第一と心得て、  
 誠実に報じて参る。

岐阜市長  
 林町之部  
 新聞  
高岡

右紙品極白色ニ而至スルニヨキ半切立軸五寸九分八厘  
 横軸八寸六分也上三分五厘ヨリ四分五厘明ク下七分  
 リ三分明ク始メ上、外七分明ク下、外八分明ク書簡袋  
 二入ト二重ノ袋上白色、薄キ紙下、赤紙表紙上、立軸

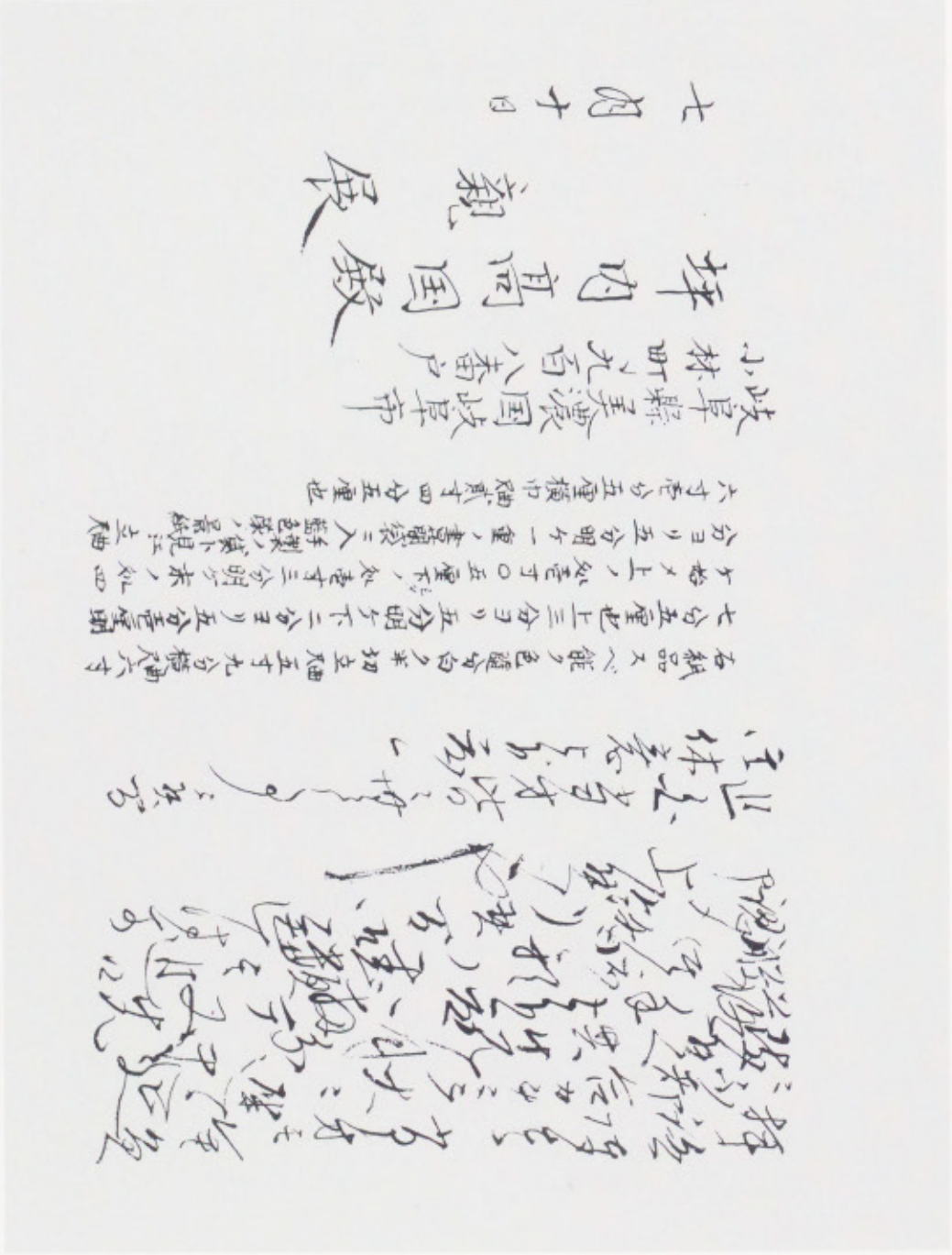
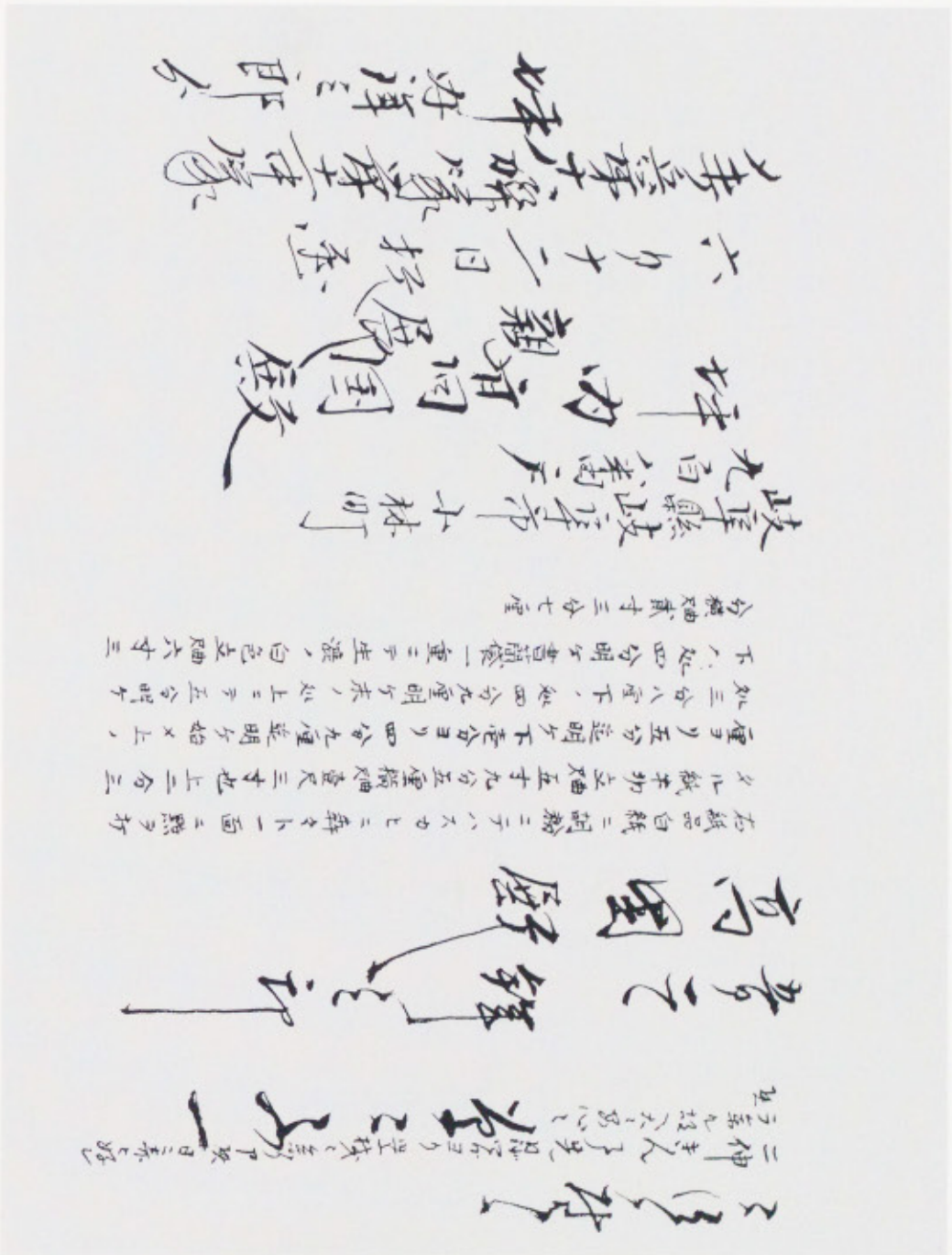
岐阜新聞  
 林町之部

岐阜新聞  
 岐阜市長  
 林町之部  
 新聞  
高岡





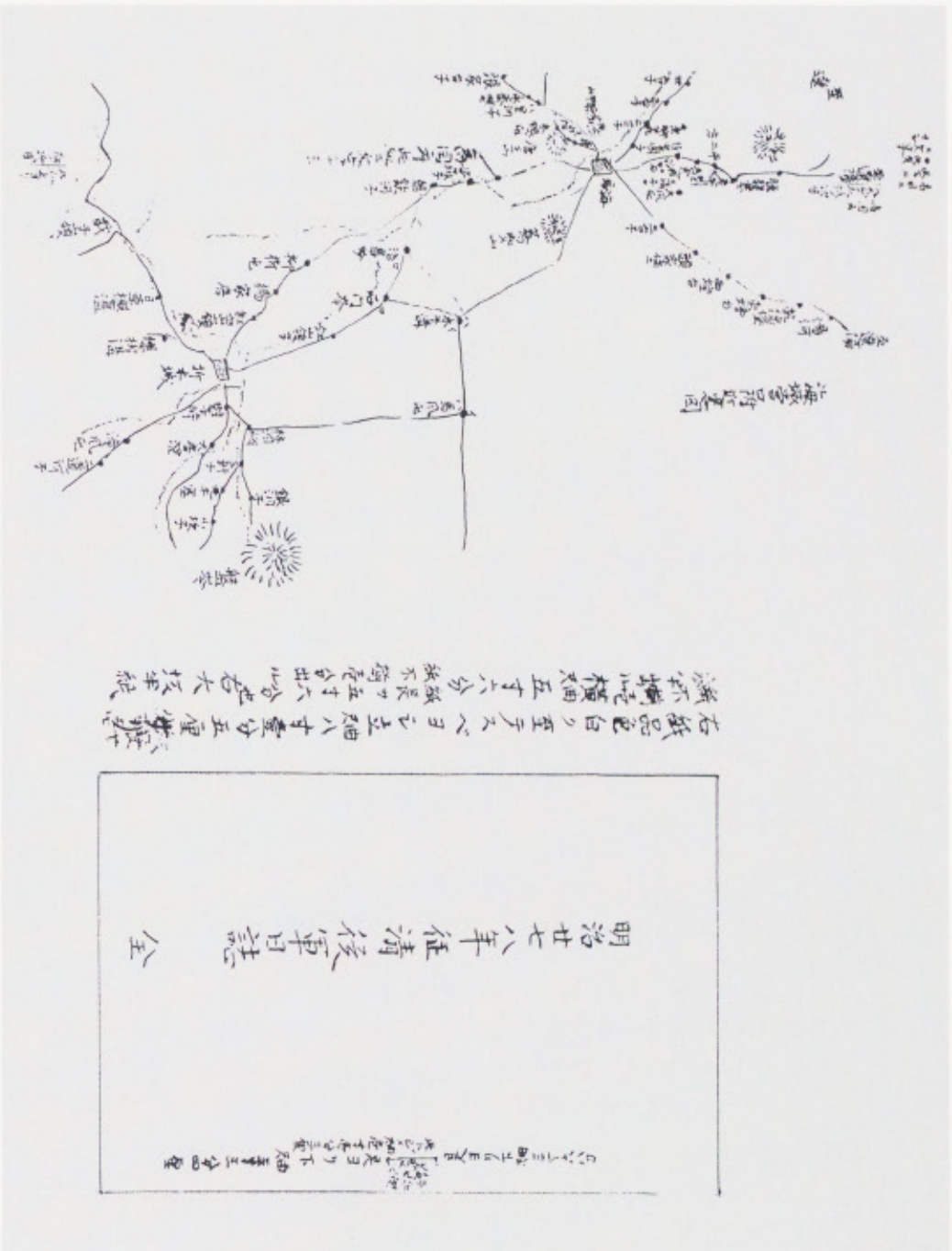




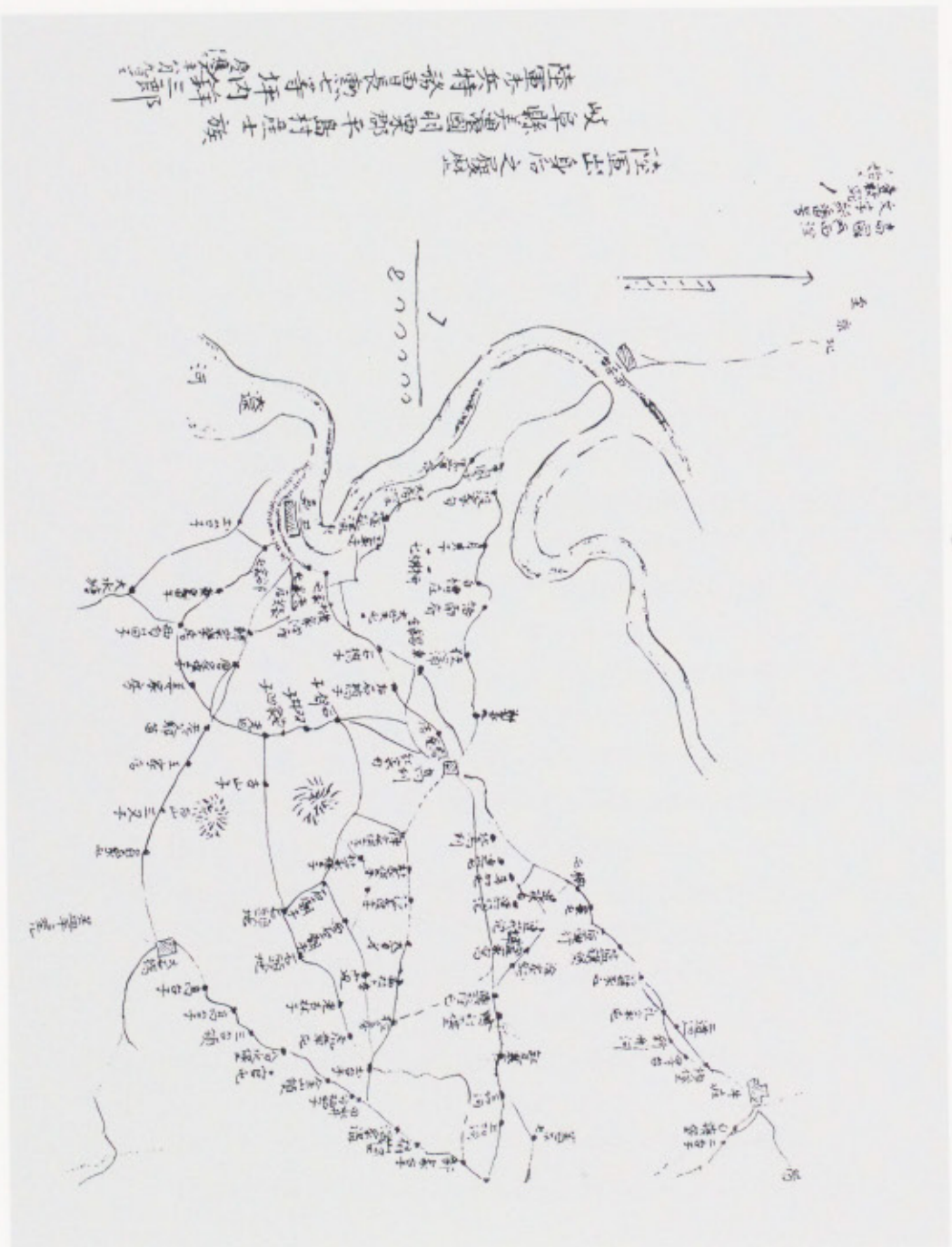








(東豐) 川沓也



高樫原流坪内家一統系図並由緒

一四三



明治十八年二月十三日東京府陸軍教導團步兵大隊へ入  
 公 年七月四日ヨリ脚氣症ヲ二十二日間入院  
 公 年十月十六日二等生徒被申付  
 公 十九年三月十三日一等生徒被申付  
 公 年六月廿五日歩兵科學術卒業  
 公 被陸軍歩兵二等軍曹  
 公 名古屋鎮台附被申付  
 公 年七月八日 赤兵隊十聯隊附被申付  
 公 年七月九日 第八中隊附被申付  
 公 年五月四日 精勤ニ付七日間、褒賞休暇賜  
 公 廿一年一月六日右同斷ニ付廿八日間ヲ賜  
 公 年五月廿六日給一等給  
 公 年九月九日精勤ニ付廿八日間褒賞休暇ヲ賜  
 公 年九月十日ヨリ脚氣症ヲ五日間入院  
 公 廿二年七月六日精勤ニ付廿八日間褒賞休暇賜  
 公 年五月廿一日被陸軍歩兵二等軍曹  
 公 廿三年九月一日行狀方正勤務勉勵ヲ褒賞ニ付模範  
 公 賜リ以毎月一日褒賞休暇ヲ賜ル  
 公 年十月十五日給一等給  
 公 廿五年五月廿三日給奏掛被申付  
 公 廿六年六月廿四日七ヶ年経過ニ付被給年功加俸  
 公 廿七年八月廿四日徳清為大戦地ニ赴  
 公 廿七年八月廿七日朝鮮國元山津、向宇品港出帆  
 公 年八月廿九日之山津ニ上陸  
 公 年九月十三日朝鮮國浪安府戰陣ニ参戦  
 公 年九月十五日 平壤城攻撃ニ参戦  
 公 年十月二日被陸軍歩兵中隊長

2

(和印)

(和印)

?

公 年十月四日第九中隊附被申付  
 公 年十月廿四日鴨緑江戰陣ニ参戦  
 公 年十月子吾虎山戰陣ニ参戦  
 公 廿八年一月十七日清國海城德家園子附近戰陣参戦  
 公 年一月廿二日右同斷  
 公 年二月廿七日 唐王山附近戰陣ニ参戦  
 公 給一等給  
 公 年三月四日 牛莊城攻撃ニ参戦  
 公 年三月九日 田庄台戰陣ニ参戦  
 公 年五月廿五日 年功依リ叙勲公ヲ賜瑞寶章  
 公 年五月廿七日 被陸軍歩兵特務曹長  
 公 第十中隊附被申付  
 公 年六月二十日率 邦字出港、向清國大連灣、出帆  
 公 年六月子吾山港ニ到着  
 公 年六月子吾山豐橋衛戍ニ凱戦帰營  
 公 年十月十六日叙勲公ヲ賜瑞寶章、空七拖舟  
 公 廿九年七月十日 賜陸軍軍章  
 右 明治廿九年六月調  
 坪内銚三郎 士天  
 皇朝東洋 西 印  
 四半 四半 四半  
 人民、性質 朝鮮人、風俗及全國土風  
 官吏、性質 授給シ大皇帝之官職ヲ叙シ、皇朝之臣トシ、皇福ヲ  
 恩ニシテ、至事ニ通セ、勞働ニ厭、



















高田 新田

七月八日 午七時四十分世景公九時三十分川府着陸營

九月九日

四地・渾五ノ

九月十日

有牙天塚遺蹟之區東ノルノ隈故府向者天塚生業晴十五

分出致河正流而流無止時露露故自天塚記時

九月十二日

午五時當年原三橋ノ自地出致午後四時十五分一泊露

天文

九月三日

午三時三十分頃萬岡山並文標官高寺堂東生(五五時頃)

比有三十未表ノ打浴桶道ノ到者小休止志故自半六浦築種獲

ノ秋詰前片候頃萬岡山并搜索ノ下台地ノ中流致教育傳羅

ノ出生頭ニ秋詰片候對面ニ馬計ノ其傷一匹遊見

ノ以ノ騎與後退却ノ無控攝之七廿大錄ノ自其記自道

ノ頃萬岡山並文標官高寺堂東生(五五時頃)

ノ有牙天塚遺蹟之區東ノルノ隈故府向者天塚生業晴十五

分出致河正流而流無止時露露故自天塚記時

ノ以ノ騎與後退却ノ無控攝之七廿大錄ノ自其記自道

ノ頃萬岡山並文標官高寺堂東生(五五時頃)

ノ有牙天塚遺蹟之區東ノルノ隈故府向者天塚生業晴十五

分出致河正流而流無止時露露故自天塚記時

ノ以ノ騎與後退却ノ無控攝之七廿大錄ノ自其記自道

ノ頃萬岡山並文標官高寺堂東生(五五時頃)

ノ有牙天塚遺蹟之區東ノルノ隈故府向者天塚生業晴十五

分出致河正流而流無止時露露故自天塚記時

ノ以ノ騎與後退却ノ無控攝之七廿大錄ノ自其記自道

高田 新田

九月三日 午三時三十分頃萬岡山並文標官高寺堂東生(五五時頃)

比有三十未表ノ打浴桶道ノ到者小休止志故自半六浦築種獲

ノ秋詰前片候頃萬岡山并搜索ノ下台地ノ中流致教育傳羅

ノ出生頭ニ秋詰片候對面ニ馬計ノ其傷一匹遊見

ノ以ノ騎與後退却ノ無控攝之七廿大錄ノ自其記自道

ノ頃萬岡山並文標官高寺堂東生(五五時頃)

ノ有牙天塚遺蹟之區東ノルノ隈故府向者天塚生業晴十五

分出致河正流而流無止時露露故自天塚記時

ノ以ノ騎與後退却ノ無控攝之七廿大錄ノ自其記自道

ノ頃萬岡山並文標官高寺堂東生(五五時頃)

ノ有牙天塚遺蹟之區東ノルノ隈故府向者天塚生業晴十五

分出致河正流而流無止時露露故自天塚記時

ノ以ノ騎與後退却ノ無控攝之七廿大錄ノ自其記自道

ノ頃萬岡山並文標官高寺堂東生(五五時頃)

ノ有牙天塚遺蹟之區東ノルノ隈故府向者天塚生業晴十五

分出致河正流而流無止時露露故自天塚記時

ノ以ノ騎與後退却ノ無控攝之七廿大錄ノ自其記自道

高田 新田

九月三日 午三時三十分頃萬岡山並文標官高寺堂東生(五五時頃)

比有三十未表ノ打浴桶道ノ到者小休止志故自半六浦築種獲

ノ秋詰前片候頃萬岡山并搜索ノ下台地ノ中流致教育傳羅

ノ出生頭ニ秋詰片候對面ニ馬計ノ其傷一匹遊見

ノ以ノ騎與後退却ノ無控攝之七廿大錄ノ自其記自道

ノ頃萬岡山並文標官高寺堂東生(五五時頃)

ノ有牙天塚遺蹟之區東ノルノ隈故府向者天塚生業晴十五

分出致河正流而流無止時露露故自天塚記時

ノ以ノ騎與後退却ノ無控攝之七廿大錄ノ自其記自道

ノ頃萬岡山並文標官高寺堂東生(五五時頃)

ノ有牙天塚遺蹟之區東ノルノ隈故府向者天塚生業晴十五

分出致河正流而流無止時露露故自天塚記時

ノ以ノ騎與後退却ノ無控攝之七廿大錄ノ自其記自道

ノ頃萬岡山並文標官高寺堂東生(五五時頃)

ノ有牙天塚遺蹟之區東ノルノ隈故府向者天塚生業晴十五

分出致河正流而流無止時露露故自天塚記時

ノ以ノ騎與後退却ノ無控攝之七廿大錄ノ自其記自道

ノ頃萬岡山並文標官高寺堂東生(五五時頃)

ノ有牙天塚遺蹟之區東ノルノ隈故府向者天塚生業晴十五

分出致河正流而流無止時露露故自天塚記時

ノ以ノ騎與後退却ノ無控攝之七廿大錄ノ自其記自道

ノ頃萬岡山並文標官高寺堂東生(五五時頃)

ノ有牙天塚遺蹟之區東ノルノ隈故府向者天塚生業晴十五

分出致河正流而流無止時露露故自天塚記時

ノ以ノ騎與後退却ノ無控攝之七廿大錄ノ自其記自道

ノ頃萬岡山並文標官高寺堂東生(五五時頃)

ノ有牙天塚遺蹟之區東ノルノ隈故府向者天塚生業晴十五

分出致河正流而流無止時露露故自天塚記時

ノ以ノ騎與後退却ノ無控攝之七廿大錄ノ自其記自道

ノ頃萬岡山並文標官高寺堂東生(五五時頃)

ノ有牙天塚遺蹟之區東ノルノ隈故府向者天塚生業晴十五

分出致河正流而流無止時露露故自天塚記時

ノ以ノ騎與後退却ノ無控攝之七廿大錄ノ自其記自道

ノ頃萬岡山並文標官高寺堂東生(五五時頃)

ノ有牙天塚遺蹟之區東ノルノ隈故府向者天塚生業晴十五

分出致河正流而流無止時露露故自天塚記時

ノ以ノ騎與後退却ノ無控攝之七廿大錄ノ自其記自道

ノ頃萬岡山並文標官高寺堂東生(五五時頃)







九月廿八日 肅川在泊  
 九月廿九日 肅川在泊  
 十月一日 肅川在泊  
 十月二日 肅川在泊  
 十月三日 肅川在泊  
 十月四日 肅川在泊  
 十月五日 肅川在泊  
 十月六日 肅川在泊  
 十月七日 肅川在泊  
 十月八日 肅川在泊  
 十月九日 肅川在泊  
 十月十日 肅川在泊  
 十月十一日 肅川在泊  
 十月十二日 肅川在泊  
 十月十三日 肅川在泊  
 十月十四日 肅川在泊  
 十月十五日 肅川在泊  
 十月十六日 肅川在泊  
 十月十七日 肅川在泊  
 十月十八日 肅川在泊  
 十月十九日 肅川在泊  
 十月二十日 肅川在泊  
 十月二十一日 肅川在泊  
 十月二十二日 肅川在泊  
 十月二十三日 肅川在泊  
 十月二十四日 肅川在泊  
 十月二十五日 肅川在泊  
 十月二十六日 肅川在泊  
 十月二十七日 肅川在泊  
 十月二十八日 肅川在泊  
 十月二十九日 肅川在泊  
 十月三十日 肅川在泊

大國  
大國

大國  
大國

大國  
大國

十月六日  
 十月五日  
 十月四日  
 十月三日  
 十月二日  
 十月一日  
 十月十日  
 十月九日  
 十月八日  
 十月七日  
 十月六日  
 十月五日  
 十月四日  
 十月三日  
 十月二日  
 十月一日

新成里  
 十月七日  
 十月八日  
 十月九日  
 十月十日  
 十月十一日  
 十月十二日  
 十月十三日  
 十月十四日  
 十月十五日  
 十月十六日  
 十月十七日  
 十月十八日  
 十月十九日  
 十月二十日  
 十月二十一日  
 十月二十二日  
 十月二十三日  
 十月二十四日  
 十月二十五日  
 十月二十六日  
 十月二十七日  
 十月二十八日  
 十月二十九日  
 十月三十日  
 十月三十一日  
 十一月一日  
 十一月二日  
 十一月三日  
 十一月四日  
 十一月五日  
 十一月六日  
 十一月七日  
 十一月八日  
 十一月九日  
 十一月十日  
 十一月十一日  
 十一月十二日  
 十一月十三日  
 十一月十四日  
 十一月十五日  
 十一月十六日  
 十一月十七日  
 十一月十八日  
 十一月十九日  
 十一月二十日  
 十一月二十一日  
 十一月二十二日  
 十一月二十三日  
 十一月二十四日  
 十一月二十五日  
 十一月二十六日  
 十一月二十七日  
 十一月二十八日  
 十一月二十九日  
 十一月三十日  
 十二月一日  
 十二月二日  
 十二月三日  
 十二月四日  
 十二月五日  
 十二月六日  
 十二月七日  
 十二月八日  
 十二月九日  
 十二月十日  
 十二月十一日  
 十二月十二日  
 十二月十三日  
 十二月十四日  
 十二月十五日  
 十二月十六日  
 十二月十七日  
 十二月十八日  
 十二月十九日  
 十二月二十日  
 十二月二十一日  
 十二月二十二日  
 十二月二十三日  
 十二月二十四日  
 十二月二十五日  
 十二月二十六日  
 十二月二十七日  
 十二月二十八日  
 十二月二十九日  
 十二月三十日

大國  
大國

大國  
大國

大國  
大國

十月十四日  
 十月十三日  
 十月十二日  
 十月十一日  
 十月十日  
 十月九日  
 十月八日  
 十月七日  
 十月六日  
 十月五日  
 十月四日  
 十月三日  
 十月二日  
 十月一日











同六十月六日  
午より三周回、聖壇を電撃し、城を占領す

左の如く、  
其曾一新、海城を捉へ、復讐を教へ、聖壇を毀す、数回、激戦

一月三日  
折本城を看し、在りて、皆降参す、  
敵艦空を、攻め、銀鑿舟、海路、別攻し、没れ、併、当地、自、領

一月十六日  
午、敵、立、時、当地、海城、空し、所、即、令、  
海城、を、敵、約、三、千、兵、自、軍、より、三、周、回、自、聖、壇、を、垣、壁、を、透、す、

一月十七日  
午、京、十、時、三、十分、敵、約、二、千、人、海城、を、削、削、南、未、懸、之、城、を、大

一月廿二日  
午前、大、陣、以、至、海、城、を、破、建、守、敵、約、五、千、人、月、十、日、自、如、未、懸、  
當、陣、を、見、時、叫、び、援、兵、を、招、き、海、城、を、攻、め、行、之、敵、を、敵、  
兵、傷、者、十、十、餘、不、詳、新、軍、自、軍、七、百、名、中、隊、を、各、自、傷、失、

一月廿四日  
当天、敵、軍、出、陣、時、午、三、時、許、出、陣、地、を、在、北、軍、隊、  
出、水、井、を、造、(唐、王、至、巨、里、天、在、橋、間、)建、築、を、懸、懸、城、を、  
占、據、中、時、海、城、を、與、氣、運、來、烈、之、致、軍、戒、困、難、極、分、

● 聖壇を電撃す  
● 海城を占領す

(米田)

同六二月廿一日  
午、大、隊、を、代、外、午、七、時、至、金、地、聖、壇、海、城、を、送、送、急、氣、

二月廿日  
敵、近、時、海、城、を、見、時、叫、び、援、兵、を、招、き、海、城、を、攻、め、行、之、敵、を、敵、  
復、原、兵、佐、藤、大、佐、奇、下、午、五、時、至、三、隊、至、海、城、を、攻、め、行、之、敵、を、敵、  
砲、兵、中、隊、を、獨、自、守、隊、を、率、し、午、七、時、許、海、城、を、出、陣、出、陣、急、氣、

二月廿六日  
午、地、海、原、を、敵、軍、自、領、す、  
午、京、十、時、三、十分、敵、約、二、千、人、海城、を、削、削、南、未、懸、之、城、を、大

二月廿七日  
午、京、十、時、三、十分、敵、約、二、千、人、海城、を、削、削、南、未、懸、之、城、を、大

一月廿七日  
午、京、十、時、三、十分、敵、約、二、千、人、海城、を、削、削、南、未、懸、之、城、を、大

一月廿二日  
午前、大、陣、以、至、海、城、を、破、建、守、敵、約、五、千、人、月、十、日、自、如、未、懸、  
當、陣、を、見、時、叫、び、援、兵、を、招、き、海、城、を、攻、め、行、之、敵、を、敵、  
兵、傷、者、十、十、餘、不、詳、新、軍、自、軍、七、百、名、中、隊、を、各、自、傷、失、

一月廿四日  
当天、敵、軍、出、陣、時、午、三、時、許、出、陣、地、を、在、北、軍、隊、  
出、水、井、を、造、(唐、王、至、巨、里、天、在、橋、間、)建、築、を、懸、懸、城、を、  
占、據、中、時、海、城、を、與、氣、運、來、烈、之、致、軍、戒、困、難、極、分、

一月廿六日  
午、地、海、原、を、敵、軍、自、領、す、  
午、京、十、時、三、十分、敵、約、二、千、人、海城、を、削、削、南、未、懸、之、城、を、大

一月廿七日  
午、京、十、時、三、十分、敵、約、二、千、人、海城、を、削、削、南、未、懸、之、城、を、大

● 聖壇を電撃す  
● 海城を占領す

(米田)







女子止り、往、紅尾家等の五浦に清原軍、軍相留之所  
 たり、  
 興隆此、敵兵、  
 二月五日、  
 藍衣軍子、高麗地軍、五十名、附近、敵、自、女、共、降、去、  
 多、半、車、急、而、大、難、免、也、  
 老、林、子、任、兵、也、當、四、日、夕、之、時、敵、情、問、  
 清、時、才、可、意、之、至、日、降、豐、大、  
 當、此、則、敵、兵、漸、次、加、現、兵、也、今、九、津、並、數、回、  
 下、少、  
 宋、大、經、子、聞、有、大、人、到、公、川、心、宿、(區、東、本、堂、)  
 子、上、當、帝、街、生、原、馬、塚、張、  
 此、頃、未、及、發、砲、練、兵、為、之、  
 遂、中、依、家、油、庫、清、兵、其、他、  
 在、日、午、停、馬、陣、女、自、家、亦、此、時、聞、報、  
 當、此、大、言、煥、生、清、兵、三、方、日、大、鐵、之、指、揮、  
 二、月、三、日、午、時、海、城、桂、守、將、  
 去、二、月、十、五、日、經、心、生、之、間、牌、  
 七、日、言、之、至、  
 白、苗、子、家、慶、兵、三、千、八、百、  
 二、道、海、馬、山、兵、千、八、百、  
 紅、橋、庄、黃、旗、軍、馬、軍、使、張、某、兵、二、千、八、百、  
 及、井、子、唐、軍、使、教、兵、千、九、百、八、十、  
 大、宮、心、唐、軍、使、兵、至、京、宋、慶、兵、二、千、八、百、  
 花、油、庫、之、軍、大、人、經、兵、千、八、百、  
 花、油、庫、之、軍、使、(曾、曾、)兵、千、九、百、八、十、  
 牛、家、也、(曾、曾、)東、門、外、軍、主、大、人、兵、千、八、百、  
 各、務、原、市、  
 各、務、原、市、

西、八、鋪、家、子、程、國、人、兵、二、千、八、百、  
 打、川、也、  
 計、約、一、万、八、千、八、百、  
 八、日、當、口、灘、五、天、敵、衛、上、田、井、子、津、口、而、許、清、兵、往、  
 不、三、身、  
 尤、日、當、口、之、數、也、立、兒、之、邊、河、渡、  
 如、  
 老、湖、軍、兵、二、千、八、百、  
 油、屋、之、  
 之、  
 田、庄、也、  
 十、四、日、田、庄、也、  
 老、湖、軍、兵、二、千、八、百、  
 子、比、三、十、  
 全、日、有、軍、  
 昨、便、手、敵、騎、二、千、騎、  
 今、便、手、敵、騎、二、千、騎、  
 全、日、有、軍、  
 二、月、十、四、日、  
 三、日、  
 統、  
 敵、情、  
 各、務、原、市、  
 各、務、原、市、























































<p>大 郎 兵 衛 本國尾列 始 名 喜 兵 衛  <small>本國尾列 生國濃列 三井村住 吾坪内 高國 白</small>  <small>卯年 二歲 安トアリ 何ト馬國所獲ノ不</small>  <small>也</small></p>	<p>天正七巳卯年五月九三日丑刻出生        糸應三甲午年十月十一日病死法名無染道也登主鳳屠止</p>	<p>後二賢林院殿行年七十六歲吟年子龜屋定        當國各務郡新加納村少林寺三葬石埋東向</p>	<p>一始名喜兵衛暫住薩摩寺忠吉郷二尾塘須之柳門立        百石後号太郎兵衛父安定嗣家祿隱居而号太郎左衛門立        本古三郎兵衛女ヲ娶妾善頭家定外孫也</p>	<p>寛永五戊辰年四月廿一日病死安慶室法名釋妙席信女        當國各務郡新加納村少林寺三葬石牌東向        一大坂御陣惣兵衛家定第六三人嫁安出陣其外船共出陣</p>
<p>慶長十九甲寅年出生母者之本古三郎兵衛女永元坪内定        仍女ヲ娶寛文元年丑年十一月十五日病死慶定室法名雪        關妙消信女遊賢廣庭院殿</p>	<p>隱居ニテ十郎左衛門即始稱ト實ハ洋 家光公御目見        本國尾列 生國濃列 三井村住 吾坪内 高國 白</p>	<p>始 名 傳 助 後 号 太 郎 兵 衛 本國尾列 始 名 喜 兵 衛        本國尾列 生國濃列 三井村住 吾坪内 高國 白</p>	<p>慶定 始 名 傳 助 後 号 太 郎 兵 衛 本國尾列 始 名 喜 兵 衛        本國尾列 生國濃列 三井村住 吾坪内 高國 白</p>	<p>慶定 始 名 傳 助 後 号 太 郎 兵 衛 本國尾列 始 名 喜 兵 衛        本國尾列 生國濃列 三井村住 吾坪内 高國 白</p>

<p>當國各務郡新加納村少林寺三葬石牌東向        英寶五丁巳年閏十二月五日病死行年六十四歲法名林翁        道鐵居士遊賢廣庭院殿</p>	<p>當國各務郡新加納村少林寺三葬石牌下り西向        始 少 儲 寺 二 代 聖 天 經 天 經 壺 山 桑 師 寺 規 山 各 務 郡 新 加 納 村 内 廣 庭 院 殿</p>	<p>正徳三癸巳年十一月廿七日病死坪内定清寶登後 若 年 法 名 慈 性 院 殿 貞 厚 壽 心 大 姉</p>	<p>當國各務郡新加納村少林寺三葬石牌東向        當國各務郡新加納村少林寺三葬石牌東向</p>	<p>寬文六丙午年十一月七日病死法名袿登妙悟信女        瀧川各務郡新加納村少林寺三葬石牌東向</p>
<p>女子 萬 三歳病死母者永元定仍女</p>	<p>女子 七之助 三歳病死二子母者永元定仍女</p>	<p>女子 萬 三歳病死母者永元定仍女</p>	<p>女子 萬 三歳病死母者永元定仍女</p>	<p>女子 萬 三歳病死母者永元定仍女</p>















高定 高定 幼名岩松 又聞之達 本國尾刈 弓太郎兵衛 貞正  
 貞正 三丙寅年五月廿三日申刻誕生  
 貞保 四己亥年九月九日癸卯禮誕 豐田大守司貞保  
 同年六月朔日家督相續  
 同九甲辰年八月九日為家督御禮東武江發定同十九日答  
 前渡坪内負行下道平瀨坪内同一年九月五日家元坪内惣  
 兵衛定時同道御老中御月春松平左近將監殿若年春松平  
 能登守殿江家督御禮奉申上候坪内貞保禮申上候坪内貞保  
 同月十一日居宅小日向履轡坂屋敷二於有懸應暇忌同  
 十二日御茶印拜見之申見無之御同十三日發江府三人叙  
 在所同北二日歸村  
 享保十四己酉年十一月十四日病歿行年四十四歳  
 法名勝玄院殿壽外宗運居士  
 當國各務郡新加納村少林寺三尊石牌北向  
 明知六己丑年十月三日病歿高定室法名負松院殿源苦清  
 孫大姉當國各務郡新加納村少林寺三尊石牌北向  
 男子 定次郎  
 元禄二己酉年誕生 明知  
 女 清春  
 正徳元辛卯年十二月十三日濃加安八郡大垣拾万石戸田  
 家之功臣戸田權左衛門政純為養女同十五日嫁家嫡左兵

衛政齋後生一女孩一男歿後離縁  
 明知四丁亥年十二月十一日病歿法名林興院淨因壽清大  
 姉當國各務郡新加納村少林寺三尊石牌下北白石解島  
 左二  
 正洞院安相了心居士  
 林興院淨因壽清大姉 三名一本之石牌  
 法雲院性岩了貞大姉  
 女子 春山女母八林興院  
 警州家名郡家名松平下總守 貞保 八祭寅年三月  
 其牌諱 玉那忍 家中貞平歳之由吉短室  
 工牌諱 石 家中貞平歳之由吉短室  
 元文三戊午年六月廿七日病歿法名法雲院性岩  
 了貞大姉  
 政香 齊武四竹園 母八林興院  
 延享四丁卯年四月九日病歿法名正洞院安相了  
 心居士  
 仍傳  
 初定時此項仍傳上改後又齊後左衛門又總兵衛  
 又後伊豆守 元禄申歲壬辰生 母本家 齋後左衛門 貞保 寺  
 室永六己丑年八月四日發濃列ノ同十一日江戸赤坂火消  
 屋敷二看左衛門建降下改公此時年 小日家元坪内惣兵  
 衛定重為養子同年十一月廿七日 家宣公江 御目見



羽栗郡中野村之内高百石ヲ持奈入流知村之内太甲兵衛壽  
享保四己亥年九月廿七日家督享保十一卒己年八月廿七  
日隱居願刺髮蓬雪卜改名今年七十歲安永三甲午年三月  
十六日病死行年八十三歲法名陽撤院殿從五位下前豆別  
刺史春嶺道雪大居士武列豐崎郡下流谷仙心宗 派  
徒秀東北寺三井

高代 定能 如名龜太郎 後太郎兵衛 本國尾列 生國濃州

享保五庚子年九月十二日寅刻誕生

寛保二壬戌年四月廿四日京都江從足五月三日到着同七  
日家元江三人共罷出候同九月右三人共御老中廻り多知  
三郎左衛門へ向相領候同十日御月當御老中松平左近  
將監殿若年寄本多伊豫守殿江奉家御出被成候而三人共  
先例之通同道、儀御為相濟申候同月十一日家元拜内懸  
兵衛定時同道三人共御月當御老中松平左近將監殿御若  
年寄本多伊豫守殿江奉家御禮奉申上候坪内位在齋門定  
坪内儀兵衛定儀御老中御月十二日御月當御老中松平左  
近將監殿若年寄本多伊豫守殿江奉家御禮奉申上候坪内位在齋門定  
兵衛定儀兵衛定儀御老中御月十二日御月當御老中松平左  
近將監殿若年寄本多伊豫守殿江奉家御禮奉申上候坪内位在齋門定  
寛延元戊辰年十二月廿三日病死行年二十九歲法名香有  
院殿積岳月清居士濃州參務新加納村妙林寺三井石牌  
アリ北向  
室尾別藩中殿新敷馬秣久賀女祐式奈妹紋九、四樂三ノ  
引表紋  
寛政九丁巳年正月廿二日未若利項病死七十四歲法名靜

晴院殿教室智春尼大姉同九月四日出檀當國各務郡新加納  
村妙林寺三井石牌アリ北向

男子 如名猿五郎 後總馬妙琳寺下主

享保八癸卯年六月八日亥刻誕生

延享元甲子年十二月十三日病死行年二十二歲法名淨心  
院殿英坊玄功居士當國各務郡新加納村妙林寺三井石牌  
アリ北向

定能 如名彦太郎 本國尾列 生國濃州各務郡三井村字西屋敷

延享四丁卯年生

宝曆十二壬午年八月四日暮六ノ時病死行年十六歲法名  
清源院殿月聖園心居士當國各務郡新加納村妙林寺三井  
石牌アリ北向

定秀 如名塞五郎 後左太馬 本國尾列 生國濃州各務郡平島村野澤

享保壬戌戌年誕生母者智鏡院殿

美濃國羽栗郡平島村坪内佐左衛門定基三男也宝曆十三  
癸卯年二月十五日當國各務郡三井村坪内彦太郎定基之  
跡式相續トシテ人家入  
安永七戊戌年八月廿五日家督為御札東都江發足九月五  
日江戸大塚坂下町旅宿へ成戌ノ半時各同九月三ノ共殿  
斗目麻上下着奈元御役屋敷御屋敷江出心太刀箱二



入目録馬代進上坪内式部疏初而逢也同十四日家老多知  
由三郎左衛門大進三子明十五日登城候間其以前此方へ  
明六ノ半時三御出可被成明日昼時揃合料理棟中付候間  
在篠御心得可被成殿申奉比同十五日三人共御役屋敷へ  
罷出御申候上登城前面會料理本膳出比右相濟小袖志  
ノ被下候同年十月十六日御老若へ廻勤家元拜内式部統  
同道家督御礼ナリ御月番御老中田沼主殿頭殿御月番若  
年寄清井石見守殿へ題目之御礼相濟平喜坪内定候ナリ  
同年十一月九日江戸出立甲夾街道ヨリ中仙道通行候  
御同北日歸等

天明六丙午年五月廿一日午刺卒中風ニテ病死  
享保十五庚戌年出生當年五十七歳法名奇老院殿逸堂定  
奏居士同北四日出権當國各務郡新加納村少林寺三峠石  
牌ナリ尚向

定秀ノ年號也四配二御老若起勤ノ時子年三十  
歳式部左衛門三十三歳嘉茶衛巳年三十三歳佐左衛門成  
年四十九歳左太馬六十八歳又後知田三十三歳  
天明元辛丑年五十九歳ニ相成候二件置藤樹明卜ノ  
十八歳ノ者學識ノ處ニテ干渉ナシ也  
巳年記綱有之二

室三六 郡大寄住居次代等合高六百七十石中寄與五郎  
女代野月女故妻故六角二室内容花菱  
江戸屋敷 同本家叔父 上野守外 櫻田中屋敷備中上野郡松山  
谷出者ノ時 同屋敷 櫻田中屋敷備中上野郡松山  
北五日娶 文化九壬申年七月十日夜決刺理ヲ縫リノ卒中風ニ  
有之子刻病死法名瑞祥院殿天嚴自降大姉  
同十三日出権當國各務郡新加納村少林寺三峠石牌尚向

文化九壬申年七月十日夜決刺理ヲ縫リノ卒中風ニ  
有之子刻病死法名瑞祥院殿天嚴自降大姉  
同十三日出権當國各務郡新加納村少林寺三峠石牌尚向

女子 幸女 後久如

明和五戊子年誕生母者本室瑞祥院殿  
寛政元己酉年四月九日出立同計一勢列安濃郡津藤堂家  
之家老藤堂教馬室同二庚戌年謝縁嗣珠六願九日  
文化元甲子年二月三日出立當國郡上郡八幡青内急四方  
八千石藩中家老小出弥左衛門公純江崎名久ト改公今年  
三十七歳

文政十二己丑年九月十七日小出弥左衛門公純後室玉泉  
院死法名玉泉院殿妙味日深大姉行年六十二歳八幡  
町日蓮宗 山伏寺埋葬  
明和六己丑年出生平寄村近十郎兵衛方二世詰致六坪内  
定儀親分ト成而家元江饒濟之上連又天明元辛丑年正月  
續書開濟同年十一月十五日元腹ヲクテ坪内寄八郎養子  
天明六丙午年十一月廿八日辰九ノ時抱瘡ニテ嘗ヨリ病  
病死行年十八歳歿巳年三十五歳其母出立ノ趣也ノ年二  
ノ親レバ二十三歳ニテ十八歳歿去少林寺ノ遺公儀  
二棟レバ二十三歳ニテ元腹ニ當リ患相語  
法名大蓮院給智全勝居士  
同北九日出権

女子 與曾ノ女

明和七庚寅年誕生母者瑞祥院殿  
享和元辛酉年春正月九日出立勢列一志郡父居高五万三  
千石藤堂佐清寺向遠藤中田中厚之丞ノ嫁入今年北二歳  
享和二壬戌年正月廿四日病死法名智芳院春嶽志光大姉







少林寺二築石解り南高

女子 鉄子

安永五丙申年六月十九日申中刻誕生母者瑞祥院殿

寛政十一己未年四月十五日三井村内定高方江自雲院

未子年七同道ニテ縁談ノ事ニ付參上酒一樽賜吉包持參

手專坪内氏大縁結手十九日鉄鼓符同九五日昼内々引

叔ニ付瑞祥院ノ子女態之至同道入未手專村住坪内佐左

衛門定興室卜成ル今年廿四歳同日夜ニ入リ婚礼相濟

享和元辛酉年七月朔日幕席同年十一月十九日子ノ刻女

子誕生各國ニ女

享和二壬戌年九月十四日暮六ツ時産旁ニテ病死テ難ニ

氣子引廿今年七歳各務原御所位納家元律屋八十八日

法名妙蓮院殿心奉智香大姉同十九日未ノ中刻墳出棺

當國各務郡新加納村少林寺二築石解北向

如名父馬之至 後本即兵衛 本國濃洲

安永六丁酉年七月十五日誕生母者瑞祥院殿

兄定高卜不和ニ片京郡江行キ堂上中山大納言參親春江

ツカへ波川父馬之至下云文化九壬申年倉元定高大病ニ

付興年九月十四日崩渡三井ヨリ一人宛達シ呼寄候同九

日夜定並歸也

文化九壬申年十一月十日家督相續奈添入坪内定興同伴

各務郡新加納村家元律屋産出候

文化十一甲戌年十一月廿二日營札江洲犬上郡養徳城室

勢五万石井伊掃部頭直定藩中保村外記姓ノ聖名代野ヲ

天保三壬辰年九月四日京都江出立守仙遊通行同十三日

江ノ善同廿一日江戸出立同五日頃歿存江到着殿府御加

番也 兼如坪内榮吉定保並ニ兩人共所々巡見定昌ノ時三

保へ行ク時右三人馬ヲ馳セ本郡兵衛定茲落馬又

同四年 月於駿府ニ三人之上帝被申付候嘉丁兵衛定昌遊理

未年定昌顯元傳ニ成ル

天保四癸巳年十一月廿八日稱 御老若肥勤三人共家督御

禮並ニ駿府御加着相勤候ニ付島也是ハ先例ニテ元禄年

中駿府御加着ノ時ノ禮也家元坪内榮吉定保並ニ三同道

坪内本郎兵衛定並立付坪内金三郎定國勤坪内嘉兵衛定

昌世 御凡番傳老虫松平周防守殿御月番若年寄小笠原

相摸守殿江廻勤御禮申上候小笠原殿門前ニテ家元定保

ニ別レ申候 用候長相候御禮申上候小笠原殿門前ニテ

松平周防守殿去願申上候御禮申上候御禮申上候御禮申上

無之儀防字ニテ大分ナリハ本郡兵衛定昌ノ如ク札

何方ニテ出候致シ候乎漸々ト閉ニ含メナリ之同年十二月

世四日定並人夜然ニ致シ江戸発足東海道通行翌五甲

午年正月四日歸着家元宛ニ於テ向家ト神文血判シテ

出調印入印形ヲ小カニテ字ヲ分テテ向家ト神文血判シテ

ト申候 見同申ノ島ト三人此時リ定國如夜鼠ハナリ申人罷

大定何様ノ御禮申上候御禮申上候御禮申上候御禮申上

其後寺社奉行江出願申上候御禮申上候御禮申上候御禮申上

分家ト申候御禮申上候御禮申上候御禮申上候御禮申上

同日申候御禮申上候御禮申上候御禮申上候御禮申上

仙遊通行其後立未大御禮申上候御禮申上候御禮申上候

御禮申上候御禮申上候御禮申上候御禮申上候御禮申上

御禮申上候御禮申上候御禮申上候御禮申上候御禮申上

御禮申上候御禮申上候御禮申上候御禮申上候御禮申上

御禮申上候御禮申上候御禮申上候御禮申上候御禮申上

御禮申上候御禮申上候御禮申上候御禮申上候御禮申上

御禮申上候御禮申上候御禮申上候御禮申上候御禮申上

御禮申上候御禮申上候御禮申上候御禮申上候御禮申上

御禮申上候御禮申上候御禮申上候御禮申上候御禮申上

御禮申上候御禮申上候御禮申上候御禮申上候御禮申上

御禮申上候御禮申上候御禮申上候御禮申上候御禮申上

御禮申上候御禮申上候御禮申上候御禮申上候御禮申上



十代將軍 家康公御十男從三位宰相右衛門督藤原  
○此三代將軍 家康公御十男從三位宰相右衛門督藤原  
禮二代將軍 家康公御十男從三位宰相右衛門督藤原

阿部伊勢守 正以殿江差出之處同年十二月三十日  
夜半頃 尾州家御用人津田縫殿守リ數願當柳屋是之  
ニ而享保彦申渡置候間御ヤク不致下ヤクトノ文面也  
尤初ニ御上屋敷市々谷柳殿ニ於テ數願書差上申候節津  
田縫殿御受取也但家元ヨ殿ハ若年寄藤原 弘化ニ己年

四月下旬ヨリ六月中旬迄五十日間門於江戸ニ家元ヨリ  
定職江被申付候江伊四谷西ニ屋敷替勤番ノニヶ條外  
ニ凡十ヶ條經被申付候無據調印又同年九月十八日定職  
江戸出立物番和年之處部屋住ニテハ難相成由家元ヨ中  
仙道通行道中御關下下乘又フ片書 坪内拾太郎ノ致ス

由、風聞也家元ノ旨ニ任セ出立同世七日歸返  
弘化丁未年三月四日己、刻卒中風ニ而病死朝ヨリ概  
行年七十壹歳同八月廿八ノ半時殊刻出指法名法雲  
院殿實道定心居士津別各務郡新加納村檀宗臨濟派山威

野郎邊西花園村字花籠慶山少林寺ニ埋葬石碑南向  
正法寺外心寺住持  
法雲院僻世石碑ノ表左右ニ

辭世 散々世々  
吟々揚々有水

天保八丁酉年正月七日夜半ヨリ八日之晩迄ニ書院空開  
共表不殘燒失入雪障ニテ近邊ニモ知レバ定職部屋住ニ  
而夜、居間ニ據而房ル處ノ障子杯江火燃付ノ音ニテ目  
ヲ覺レ候由右者前日表ニ銅置き申候懸ニ火ヲ入レ候處  
右營書院ニ在リ候ヲ捕捕ル右ノ火飛散リレオ水ヲ掛ケ  
消ス右、火殘リ居書院ヨリ起リテ表計リ燒失也往古ノ

善請、由與向キハ昨申生善請是又往古之善請之由也  
嘉永六癸丑年二月十一日明ケ六ノ時卯刻定並後室見性  
院佛堂見性院病元法名見性院佛堂妙心大姉同十四日  
夕七ノ時還頂神遷出棺也濃別各務郡新加納村字村内釋

宗龍慶山少林寺ニ埋葬石碑南向



又其真名  
歌部中各  
三郎  
小三郎  
村山  
下村

女子 中女

安永八巳亥年九月廿九日誕生母者春茂

濃州各務郡前野村二丁目一丁目後野村北洞村百姓

小七方へ遣は養育之志翌年誕生二年前野村小七方江浦

一種被下候同世日濃列上石津郡多良表ヨリ買ひ度由三

女子 婿婦

安永八巳亥年

詳院殿一子外江

文政六癸亥年十二月廿五日明ヶ六ノ時頂上妙橋地四十

五藏法名靜照院明光智寂大姉同世七日出棺濃州各務郡

新加納村字村内觀宗龍慶山少林寺ニ埋葬石塚西向

静院殿  
河文字

井定秀へ向ヶ申込二付各務郡前野村慈雲院同村年六江  
中馬村勘右衛ヲ以テ相頼此間掛合薄今日此方へ坪端也  
引取兼而養育申請候石村小七並妻送り来レ慈雲院勘右  
衛門工毛料理被下三井坪内定秀毛来レ此末時、日記ニ

女子 八千代

享和二壬戌年正月十三日誕生母者カ少女桃嶺院殿

文政八己酉年十二月二日三列 那松早村文代寄合高

四百四十二名余松平太郎左衛門源 江塚六二十四歳

牛込ノ屋敷 至子養女ノ由實奉ニテ

文政十二己丑年十二月七日病死法名理香院殿敬誠堂普橋

大姉年十四歳

男子 知名龜三郎



文化二〇五年八月廿五日誕生者推嶺尻殿  
同六巳年八月廿日病死今年五歳  
法名實相院廣園兼如童子  
當國各務郡新加納村少林寺三葬石牌東向

男  
子  
幸  
太  
郎

文政三庚辰年十月十一日誕生母者見性尻殿  
同四年巳年八月廿一日中ノ利病死今年二歳  
法名本光院聖智堂幸子同廿二日夕暮出棺  
當國各務郡新加納村少林寺三葬石牌西向

定職  
子  
如名捨三郎 後捨太郎 又太郎兵衛 本國 江別

天保元庚寅年三月廿九日養子坪内定重無養子三依子同  
人妻女、四里、堀也 江州嘉榎井伊家也三郎五石江吳  
藩中澤村覺右衛門二男子年ノ生シ今年十五歳  
弘化四丁未年五月家督相續嗣生信列福葛屋山村甚兵  
衛舎兄同姓登七郎 女ヲ娶各未行女尾列愛媛部名古屋  
住居後室ノ次而實松院又其後嗣

文久三癸亥年十月廿一日未中利水腫ニテ取リ、瘡宛行  
年四十八歳法名清尻院融納山保職居士同廿七日出棺  
當國各務郡新加納村少林寺三葬石牌南向

嘉永五壬子年四月太郎兵衛ト改名  
安政元申寅年正月保職ト改メ辨ニ甘冠ト云字ヲ改メト御改  
右兩人之一人ノ右畔三前ノ左右ニアリ西人者歌道執心  
ナリ何レカヨミシカ不知 名一セ乃爰の槍け定のり

嘉永元戊申年 誕生母者未女長松院  
文久元年四月 日當國郡上郡八幡青山氏島石  
藩中小出弥左衛門子息同姓鞠復江塚六今年十四歳  
明治元戊辰年春 月曾孫左衛門乱心致シ作勤負ヲ報告  
致二付里方へ引取ル一男五三郎一女姪竹女出生  
明治三庚午年二月東京住居中ニ池端七軒町司字秋原津  
太三塚ノ後一曾出生浦次郎ト云  
同六癸酉年三月廿三日病死東京ニ今年廿六歳  
法名光慶知到信女

因ニ云仲ハ勤王ノ義ヲ入組テ火柱ヲ致シテ下宿僅ト是受  
切付持來ニ赴行ク又同藩ニ大ト見出シ掛置致シテ妻ニ去リ、大  
指者本藩ニ行ハ死メ其後金持ニ仁出メ又其後病化メ

嘉永元戊申年 誕生母者未女長松院  
文久元年四月 日當國郡上郡八幡青山氏島石  
藩中小出弥左衛門子息同姓鞠復江塚六今年十四歳  
明治元戊辰年春 月曾孫左衛門乱心致シ作勤負ヲ報告  
致二付里方へ引取ル一男五三郎一女姪竹女出生  
明治三庚午年二月東京住居中ニ池端七軒町司字秋原津  
太三塚ノ後一曾出生浦次郎ト云  
同六癸酉年三月廿三日病死東京ニ今年廿六歳  
法名光慶知到信女

因ニ云仲ハ勤王ノ義ヲ入組テ火柱ヲ致シテ下宿僅ト是受  
切付持來ニ赴行ク又同藩ニ大ト見出シ掛置致シテ妻ニ去リ、大  
指者本藩ニ行ハ死メ其後金持ニ仁出メ又其後病化メ

男子 如名五三郎  
明治十四年巳年 月 日 東京 藤原 義春 城中 病  
死 當國 厚見 郡

今冬以法此男不泊茲  
明治三庚午年閏十月十七日病死定職室江戶奉郷御寺町  
是迄西人之石牌二法名長松院殿貞室全標大姉ト世知  
寺地中天澤菰知誠廣門大知高ヨリ 法名妙輪院透費章  
戒名付實トシテ意人妻ニ不入母直メテ  
貞大姉ハ此年今夏四十四歳 賴治 元政 承年 冬ヨリ  
寺者江戶濱津下谷釋宗海禪寺三葬















坪内一親之者共由若覽

享保十七子年御目付察江差出候引得

一坪内喜太郎職藩頭 天正十八庚午

權現様關軍御入國以後被 召出上総國山口村千五百石武列

伊奈本等之部五百石都合敷千石拜領仕候嫡子惣兵衛職改番

二男嘉兵衛三男佐左衛門四男太郎兵衛四人之子共朝辨陣之

節伯父前野但馬守政繼職一所二朝辨二渡邊伺七茂手身候

而シヤクノ之首計捕申候其後慶長二丁四年九月

權現様江割而被 召出嫡子惣兵衛五百石弟共三八三百石元

上総國大寺村百五拾八石余大作村六拾八石餘次次郷内七拾

六石餘合三百石坪内嘉兵衛同國格郷戴百拾壹石余次郷八

拾八石餘合三百石坪内佐左衛門同國格郷内三百石坪内太

郎兵衛銘々御書出候職任只今所持仕罷在候父子五人二而都

合三十四百石知行拜領仕候

一慶長五子年會津 御征伐之時父喜太郎並伴共一所二野州

小山迄候奉仕候間今原御陣之部喜太郎御焚燒之者五拾八被

仰付忤四人之者共井伊兵部少輔先手江被爲邊各手身候而首

壹ノ定討捕申候事

一慶長六年丑年從

權現様父喜太郎並兄弟五人者共江元知行二倍之御加増

給之ニ被 成下之旨被 仰出濃州各務郡羽栗郡之内江所寄

被 仰付候當時私共罷仕候在所二而御坐候關東元知行高ニ

一倍之御加増被 成下候旨被 仰出濃州ニ而知行高六十五

百三拾三石餘相渡數百八拾貳石五斗餘不足地御坐候依之具

項之御役人彦坂小判部大又保十兵衛加藤嘉左衛門江申渡候

得寄此被 上江難申上候間不足地之分父子五人元知行高

二應對合可申旨指圖旨之則六十五百三拾三石五斗五人連名之

書拜被相渡之候夫故父喜太郎三十八百三拾三石八斗余嫡子

惣兵衛九百五拾八石四斗余嘉兵衛佐左衛門太郎兵衛五百七

拾五石七斗余死如此父子相對之上割賦仕都合六十五百三拾

三石餘拜領仕未候其後三代目惣兵衛時分慶安二丑年再被之

儀奉願新田出高等有之父喜太郎嫡子惣兵衛知行之分五千石

私共先代三人之弟共六百石宛二罷成拜領仕未申候且亦父喜

太郎儀慶長十四年病死仕其弟嫡子惣兵衛父知行自分地行共

二角ニ被 成下家督相續仕三人之弟共右之連六百石宛無

相違候

權現様被 成下代々拜領仕未申候 御朱印之儀者從

台徳庵推寛永二年十二月兄弟四人連名御一紙被 下置懸領

家惣兵衛方ニ所持仕罷在候

右之連元奉父喜太郎並嫡子惣兵衛三人之弟共

權現様江被 召出父子五人知行銘々ニ被 成下今以不相替

私共拜領仕罷在候事

一坪内嘉兵衛儀者河邊真左衛門組坪内佐左衛門坪内太郎兵

衛者水野對馬守組ニ而大御番相勤申候處御番所江

權現様被爲 成高々先祖 御尋被爲遊太郎兵衛ニ 御談御

坐候者三人之者宗事親一所ニ可被爲 召仕 思召候間御番

御免被遊之旨 御直ニ 上意被 成下夫ヨリ以來無投ニ而

在所ニ被爲指置候事

一関ヶ原 御陣以後慶長六丑年二月父喜太郎並兄弟四人之

者共元知行高一倍之御加増被 成下濃州各務郡羽栗郡之内

江所寄被爲 仰付喜太郎一所ニ私共先祖三人之者共在所ニ

被爲差置本會川出水之節不限登候堤江罷出水下村々ヨリ人

足出廿七相固候様被 仰付候

權現様毎年關東御上下被爲遊候郡者濃州以具數別桑名迄寄